

シンガポール共和国の小学校の現状視察 ～保健教育の視点から～

Present Conditions Inspection of the Elementary School of the Republic of Singapore
～ from the View Point of Health Education ～

沖津麻依, 田村和之, 小澤大成, 鈴木誠司, 砂川瑞紀

Mai OKITSU, Kazuyuki TAMURA, Hiroaki OZAWA, Seiji SUZUKI, Mizuki SUNAGAWA

鳴門教育大学

Naruto University of Education

1. はじめに

今回のシンガポールでの研修は同国で行われている教育の実際を学ぶだけではなく、教育の中に存在している健康問題について考える機会となった。また同国の訪問は私にとって初めての異国訪問であり日本の現状と比較する機会を得た初めての体験であった。同国では2カ所の初等教育機関を訪れ、数学、理科、生活、体育の授業を見学することが出来た。これらの教科の中でも、本紀要では生活及び体育の授業に焦点を当て、記述を行っていく。

2. 教育システム

まず簡単に同国の教育システムについて述べる。義務教育は初等教育に当たる小学校の6年間であり、6年次にあるPSLEという試験を受けたのち学力に従って進む進路が個々によって変化する。(図1) 前述のPSLEと呼ばれる試験は英語、数学、理科、母国語の4科目のテストを課され、英語及び母国語の試験は口頭試験とリスニングテストも実施されている。中学校以降は前述したように個々人で進む進路が異なり、大学進学や技術系の高等教育機関へ進むなど多様である。

3. 日程

- (1) 7月31日 日本出国
シンガポール到着
- (2) 8月1日 Monfort Junior School 訪問
 - ・学校紹介
 - ・授業観察(算数2コマ)
 - ・授業観察後会議・意見交換

- (3) 8月2日 Monfort Junior School 訪問
 - ・授業観察(算数, 保健体育, 生活)
 - ・授業観察後会議・意見交換
- (4) 8月3日 Temasek Primary School 訪問
 - ・学校紹介
 - ・授業観察(算数, 理科, 保健体育)
 - ・授業観察後会議・意見交換
- (5) 8月4日 Temasek Primary School 訪問
 - ・授業観察(理科, 英語, 生活)
 - ・授業観察後会議・意見交換
- (6) 8月5日 シンガポール出国
- (7) 8月6日 日本帰国

4. 各学校紹介

(1) Monfort Junior School

こちらの学校では理数科目を中心に授業観察を行った。同校は男子校で、児童数約1000人、1学年6クラスである。クラス分けは数学及び英語で行われている。授業は基本的に英語で行われている。8時から遅くとも13:30までで授業は終了し、その後は児童自宅や校内などそれぞれの場で過ごしている。また学校によって変化があるが、午前中におやつ時間を設け、自宅から持参したお菓子などを食べる時間もあることが多い。授業はパワーポイントや、スクリーン(図1)などを使用して進められることも多く、学校施設が充実している。(図2) また校内には歯医者(図3)もあり、児童は無料で歯の検診及び軽い治療を受けることが出来る。

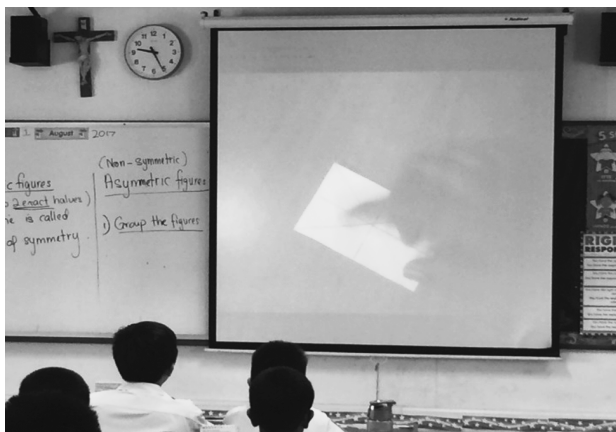


図1 スクリーンを利用した数学の授業



図4 多目的室で授業を受ける児童たち

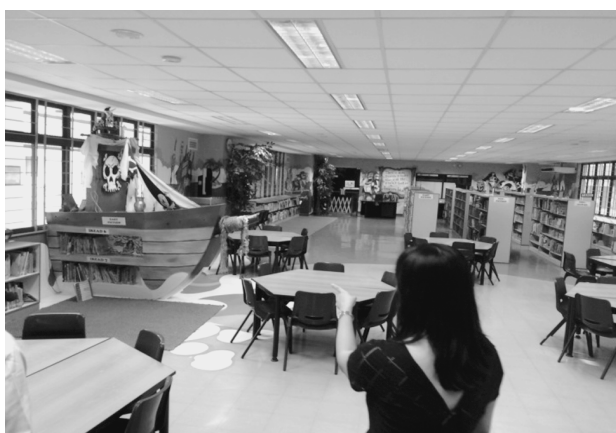


図2 充実した学校施設



図3 学校内にある歯科室

(2) Temasek Primary School

こちらの小学校では理科を中心に様々な科目の授業を見学することが出来た。こちらは共学で、こちらも児童数約1000人、1学年6クラスである。クラス分けは前述の学校と同じく数学と英語で行われている。こちらも学校施設が充実しており、LEGOを行う専用の部屋や、多目的室(図4)などが装備されていた。

5. シンガポールの医療事情について

同国の医療システムはまず国民及び永住者から政府が強制徴収を行い中央積立基金(Central Provident Fund)へ個人積み立てを行う。この中央積立基金を利用するには病院で国民番号を提示する必要があるが日常的な疾病(風邪など)には適応されず、その場合は全額自己負担となる。また自由診療が浸透しており、医療施設の競争率は高い。そのため国際的な医療水準は高く、また医療効率も良いとされている。

6. シンガポール共和国小学校の現状からの考察

-保健教育の視点から-

まず本稿では保健教育に焦点を当てるため、今回の訪問で観察を行った生活科及び体育の授業について述べていく。また同国では小学校においても教員の教科専門性を重要視しており専門科目外を教員が指導することはない。また体育、美術、音楽についても同様に、これらの教科は他の科目よりも専門性を習得するため2年間の研修期間を経る必要がある。

(1) Montfort Junior High school 体育

授業は体の動きと動きに関連する知識の習得を目指したものであった。日本では球技や陸上など、ある一つの運動や競技を継続して授業をすることが多いが、同国では競技の熟達性などには焦点を当てず、様々な運動や動きを通して身体機能の向上を図ることを目的としていた。具体的な方法としては走る、ボールをドリブルする(図5)という動きを行った後に教科書でこれらの動きがどのような身体的能力を向上させるのかを説明する(図6)というような形で授業が進行していた。このような授業のメリットとしては動きと筋肉や身体的能力の知識の関連付けが容易となることである。体動を注視し、現在行われている運動がどのような影響を身体に与えるのかを考え、知識体系を形成することにより将来的に運動を行う際に効率的な運動を行う一助となりうるのではないかと考察した。



図5 ボールをドリブルする児童たち



図6 動きを教科書で確認する児童

(2) Temasek Primary School 生活科

同校では日常的に摂取している飲食物の中に含まれている砂糖の量を考え、どのように生活を改善するのかという授業が行われた。まず最初に5-6人のグループを作り、各班に砂糖と透明なコップ、秤を配布していた。その後、生徒が自宅から持参したお菓子や、人気のお菓子に含まれている砂糖の量を教師とともに確認し、実際に透明なコップへ砂糖をすくって、含まれている砂糖の量を確認する(図7)という授業であった。対象学年は1年生であり、やや遊びと捉えているように見受けられる児童もいたが、しかしこの授業の意義としては明確に生活を変化させることではなく日常的に摂取している砂糖の量がどれほど多いのかを意識することにあるとのことであった。このように低学年から健康教育を行うことは大きな意義があると考えられる。一般的に高齢となるほど生活習慣を変化させることは困難であり、変化に対し多大なる心的ストレスを伴う。また人間は変化を起こす際に、新たな習慣が現在行われている習慣と比較して有益なものであると認識する、もしくは現在の習慣を継続することで有害な事象が生じることが予測されるとようやく変化を決意することが多い。(自己効力観を含む動機づけ理論¹⁾) また行動変容ステージモデル²⁾から考えられるように「無関心期(6か月以内に行動を変容しようと考えていない時期)→関心期(6か月以内に行動を変容しよ

うと考えている時期)→準備期(1か月以内に行動を変容しようと考えている時期)→実行期→維持期」というように一朝一夕に行動変容を望むことはできない。そのため低学年より健康的な生活習慣や観念を日常生活へ織り込む(健康的な生活を当たり前と認識する)ことは重要なのである。また単に知識を供給するのではなく、実際に砂糖の量を目にし(視覚的認知)、砂糖を自分ですくう(体験的知識習得)をすることによって、より知識と体験の関連付けが容易となり、また低学年であっても容易に理解することが出来ると考えられた。同校の教諭が語ったように授業を受けて生活習慣を変容する児童はいないかもしれないが、少なくとも授業後は日常で摂取している菓子や清涼飲料水に含まれている砂糖の含有量を考える機会となる。

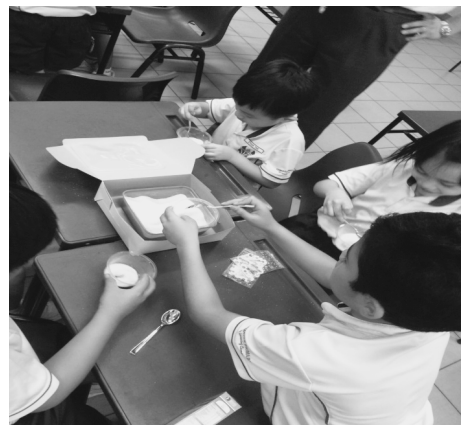


図7 菓子に含まれている砂糖をカップにすくう児童たち

7. おわりに

今回のシンガポール研修で最も強く印象に残ったこととしては知識の関連付けを意識して行っていることであった。本稿で注目している、体育及び生活科でも述べたように体験と知識習得を同時に行うことである一定の行動を行うことによって知識が想起されやすい教育を行っているように考えられた。このような教育を行うことは児童や生徒にとっても知識を埋没させるのではなく、また後々振り返った際に新たな関連性を見いだせるのではないかと考えた。

8. 参考文献

(1, (2) 厚生労働省, 特定保健指導の実践定期指導実施者養成プログラム

<http://www.mhlw.go.jp/bunya/shakaihoshou/iryouseido01/pdf/info03k-05.pdf>

2017年10月30日アクセス